

生活行為の機能性と空間感性に基づいたダイニング重視型の家族団らん空間に関する研究

A Study on Dining Space and Family Circle based on Spatial Functionality and Impression

高柳英明* 木原己人**

Hideaki TAKAYANAGI* Tatsuto KIHARA**

要 旨

本研究は、学生の子どもがいる家庭において食事の面から家族が集まりやすく、また食事以外にも利用頻度の高いダイニング空間を重視することで「団らん」をより楽しむことができるのではないかとという仮説から、学生・親世代の男女を対象にリビング・ダイニング・キッチンとの関係性が異なるサンプルモデルを用いた被験者アンケート調査を実施し、家族団らんを楽しむためにはどのようなダイニング重視型の空間が適しているのか明らかにする。SD法による印象調査とロールプレイング調査の結果から、家族団らんを楽しむために求められる空間的な要素は、1)家族の様子が見える見通しの良さ、2)食事に関連する時間においてキッチンにいる家族と会話ができること、3)姿勢をくずして座ることができる居場所があること、の3点であることが判明した。

キーワード: ダイニングルーム, キッチン, 家族関係, 空間機能, 間取り

Summary

This study is an analysis on dining space for family circle by questionnaire survey for men and women aged 10 years and over. I made a hypothesis that dining can more enjoy "family circle" by giving importance to the dining space frequently used because families are easy to gather. I conducted a questionnaire survey using samples with different living, dining and kitchen relationships. There are three spatial elements required to enjoy family circle from the results of the impression investigation by Semantic Differential method and the role playing survey.

- 1) Good prospect of the state of the family
- 2) Be able to talk with family members in the kitchen at meal related times
- 3) Place to sit and relax

Keywords: *Dining room, Kitchen, Relationship, Spatial Functionality, Housing Planning,*

1. 序章

1.1 研究背景

我が国を取り囲む文化・社会背景として、近年来の不可避なる情報化やそれに伴う生活像の多様化がある。インターネットメディアが急速に発達した2000年初頭からの10年は、パームトップ端末やスマートフォン等のハードウェアの普及のみならず、動画投稿が可能なSNSウェブサイト等の登場により、近年では「テレビ・メディア離れ」も進行している。こうした時代のうねりに伴い、戸建・集合住宅の住戸プランニングにおいても、従前のテレビを中心とした家族団らんの空間形成とそれ自体の重要性が薄れゆくように予兆される。住宅のなかで家族団らんと嗜み、寛ぐ空間として実質的に機能するのが、いわゆるリビング・ダイニングルームであるが、上記の事由に関連し、家族同士であってもプライバシーを重視したり、各人の趣味・余暇活動を自室で行う時間が増えるなかで、将来的に見れば計画上の意義を再認識する必要があり、この点について太田ら¹⁾は、家庭内の主婦の視点から示唆をしている。

一方、食事の都度家族が集まり多様な家事や雑用を行う場所として高い機能を担っているのがダイニング・ルームである。1945年以降、日本住宅公団の住宅計画基本型²⁾に見られる食寝分離³⁾や、床座から椅子座への生活様式の移行³⁾などから、食事以外の用途や利用頻度を鑑みると、

よりダイニングルーム領域の機能性を重視した新たな基本型が今後の家族団らんを受容するに適しているのではないかとこの考えから本研究の着手に至っている。著者ら³⁾⁴⁾は、特に若年層の居住像や生活実態において、既にこれらを示唆する動向を看取しており、本稿では特に調査対象を20～30代の若手に限定し、前述の命題に知見を得ることとした。

1.2 研究目的

本研究は、20代若年層及びその親を対象とし、空間プロトタイプを用いた被験者実験に基づいて、ダイニング重視型の家族団らん空間の室内計画上の適性を示すことを目的とする。

2. 被験者感性調査に向けた空間プロトタイプの構築

2.1 比較基本型の抽出

本稿では、20代若年層及びその親を対象とし、A～Cの3種のダイニング重視型プロトタイプに対する被験者感性調査を行うが、その際の比較基本型の間取りとして家族3～6名居住の一般戸建住宅から、築後26年を経た3LDK間取りの木造地上2階建事例を抽出し、リビングルーム・ダイニングルーム・キッチン領域がある1階部分を選定し、以下のヒアリングから以下の現況問題を見出した^{注4)}(図1)。図中北側には洗面室・浴室・キッチン等の衛生設備空間が集中し、南側に専用庭に面したリビングルーム・ダイニン

グループが配置されている。また本事例は、西側壁がステージハウス形式の隣家と接しており無窓壁である。本事例の生活行為の機能性を見ると、リビングルーム・ダイニングルームに対し、キッチン・ワークトップが背面式であるため家族間会話がしづらい。一方リビングルームとダイニングルームは双方 2700[mm]×2600[mm]の専有寸法であり、それらが一体空間であることから、どちらの領域に居ても会話がしやすく、特にダイニングテーブルからは着座姿勢を変えることなくリビングルーム側のソファが視界に入るため様子が伺いやすく、テレビ視聴も可能である。これらの事前ヒアリングと現況問題から、比較基本型における固定位置を、a)ダイニングテーブル、b)ソファ、c)共用デスク、d)キッチンワークトップ前の4箇所とした。またa)は着座時間・利用人数が最多であったことから、後述の被験者実験における「困らん」に対する空間感性評価の固定位置と選定する。

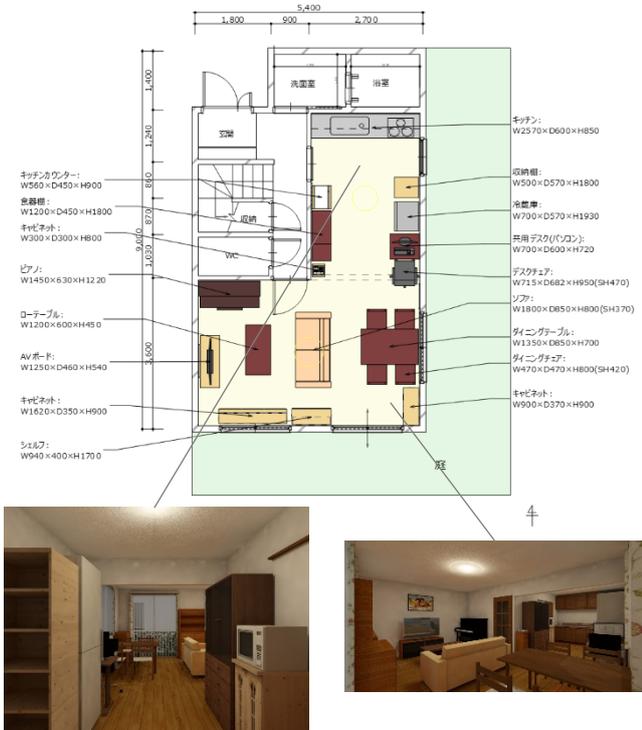


図1：空間プロトタイプ構築の比較基本型

2.2 被験者感性調査用・空間プロトタイプの構築

前節で記した比較基本型に対し、キッチンワークトップやレンジフード、生活家具や設えの配置のみを変更し、A～Cの3種のダイニング重視型プロトタイプを下記のように構築する。またこの3種に限定した事由としては、イ)対象空間を囲む界壁の位置変更は本稿調査において有意義でない事、ロ)変更箇所をダイニング領域に限定しない事、ハ)被験者着座位置の相対位置・距離の差別化が図れる事を考慮して決定づけた。

○空間プロトタイプA「設えベンチ併用型」

本プロトタイプは、リビングルーム東窓面に隣接させながら、キッチン・ワークトップを延伸させる形にて、奥行600[mm]×高さ400[mm]の着座可能な設えベンチを施した

ものである(図2)。これは椅子やソファといった着座場所を限定しない、自発的な家族の集いを促すことを狙ったものである。またダイニングルームとリビングルーム相互の物理的空間と機能要素を兼ねているため、着座・滞在時間を重視したものとして位置づける。また設えベンチは、キッチンワークトップ妻面とダイニングテーブルを利用する際の椅子としても使用可能とすべく天板高さを400[mm]としてある。また着座人数を限定しないよう内法限界まで延伸させ、全幅を4,100[mm]とした。これに伴い、対面式かつ2以上の着座が可能な背面カウンタをL字キッチンワークトップに接して設置した。またこれら一連の設え家具により、a)ダイニングテーブル、b)ソファ、c)共用デスク、d)キッチンワークトップ前の4箇所の固定位置において家族間会話が可能であり、特定位置での疎外感を低減させる狙いをもった類型でもある。

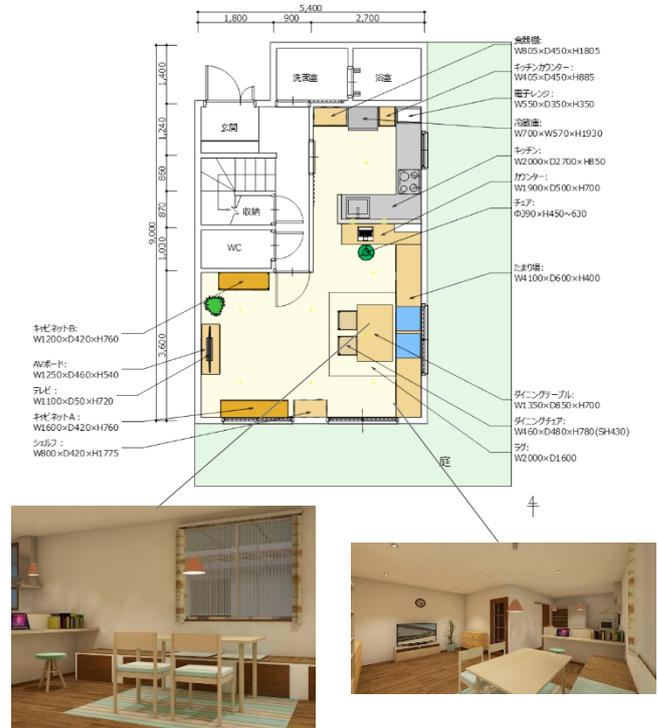


図2：A)「設えベンチ併用型」平面・空間仕様パースイメージ

○空間プロトタイプB「ワークトップ延伸型」

比較基本型を元に、キッチンワークトップと一体型のダイニングテーブルを設え家具とした。一般的にキッチンワークトップ天端高は700～920[mm]とされているが、ダイニングテーブル高に合わせ700[mm]とした注5)。この類型では、固定位置d)キッチンワークトップ前にて調理中であっても、各固定位置と対面にて家族間コミュニケーションが可能である。またキッチンワークトップとダイニングテーブルを接続配置することで、被験者に対し、炊事・家事に関連した用途への多様な感性反応も期待でき、機能的特徴を考慮すると、食事前後の配膳・片付けがしやすく、また調理時の盛り付け・食材置き等に副次的な利用が見込まれるため、食事以外の行為(勉強・書物・PC操作・余暇活動・

家事等)の受容領域となるべく、幅2,350[mm]x奥行850[mm]と基本型の家具に比して寸法を変更してある。リビング領域のソファは西壁側に寄せ、ダイニングテーブル・キッチンと向かい合うように配置することで、それぞれに着席した状態できちんと会話することが可能な距離とした。



図 3 : B) 「ワークトップ延伸型」平面・空間仕様
パースイメーシ

コンの操作、趣味活動・家事等生活のさまざまな場面で活用できるスペースとした。ソファは西側の壁側に設置し、ダイニングテーブル・キッチンと向かい合うように配置することで、それぞれに着席した状態できちんと会話することが可能な距離とした。



図 4 : C) 「縁側形成型」平面・空間仕様
パースイメーシ

○空間プロトタイプC「縁側形成型」

3 つ目のプロトタイプは、前述同様に基本型を元としており、南壁窓に沿って幅 5,250[mm]x奥行 1,100[mm]x天端高 400[mm]の着座可能な設え縁側を追加した類型である。これに伴い南面掃出し窓は下端を縁側高に合わせ 400[mm]高く変更した。A の設えベンチとの差別化については、縁側床上での着座姿勢を限定しない点にある。特にクッション等を利用した側臥位姿勢や、胡座姿勢をとる場合を想定すると、この設え縁側に被験者反応が顕著に現れるとの目算もある。また A、B と比した類型特異点としては、リビング領域とキッチン領域にて機能分化および着座姿勢・人間集合の型による団らの種別が見られることが挙げられる。機能的特徴からは、ダイニングテーブルを利用する際、設え縁側の鼻を椅子として使用可能であり、着座人数・姿勢を限定しない、つまり側臥位等の寝転ぶ姿勢が自然に促されながら、縁側着座中であっても部屋全体を見渡することができる。つまり家族間にて常時相互にノンバーバル・コミュニケーション^{注6)}が可能でありながら、適度な個体距離を保つことができる類型である。キッチンワークトップは類型 A の「設えベンチ併用型」と同様の L 型とした。ファにいる家族の様子をうかがうことができる。ダイニングテーブルは通常のものに比べ幅が長く、幅 2350mm 奥行 850mm の広さを確保し、食事の時間だけでなく勉強やパソ

3. 被験者感性調査の概要

2 章の A~C の 3 種のダイニング重視型プロトタイプに対する被験者感性調査を行う。被験者は 20 代若年男女及びその両親を任意抽出し 64 人とした^{注7)}。この被験者に対し、各プロトタイプを平面見取図および室内パース画像を印刷紙面にて提示し、各類型への感性差異と、家族の団らんに当てはまる生活行為を想起させ、配布式回答用紙に記入・回答をさせた(図 5)。この設問概要と設問意図・分析連関を表 1 にまとめる。



図 5 : 被験者感性調査の配布式回答用紙 (一部のみ)

○設問項目 1)：家族の団らんに当てはまる生活行為
 配布式回答用紙のうち質問項目 1)では、被験者属性の他、テレビ・スマートフォン・タブレットPC・ブック型PC(据置型を含む)の各々の終日使用時間[h]と、家族の団らんに当てはまる生活行為の種別(談笑する・テレビを見る・食事・パソコンを操作する・読書する・音楽を聴く・趣味活動をする・家事をする・勉強する・仕事をする・スマートフォンを操作する・その他記述式)を上限3件とし複数選択式にて問うている。

○設問項目 2)：「団らん」に対する感性反応調査
 設問項目 2)では、被験者の「団らん」に対する言語的・空間的感性についての感性反応を得るべく、表2に示す他、22言語対・形容詞対を用いたSD法(Semantic Differential Method)を実施した。

○設問項目 3)：生活シーン想起調査
 設問項目 3)では、各空間プロトタイプに対し、親・子役であると仮定した際の、各25問・全75問の生活シーンを短文にて提示し、そこでの団らん状態の想起を元に、自身にもそのシーンが当てはまる・当てはまらない・不明の三者択一回答を得る(表2)。この設問は主として各プロトタイプの物理的空間仕様や設問項目 2)の感性反応との連関をみることで、ダイニング空間の機能充実の潜在要求の要点を見るためである。

○設問項目 4)：各空間プロトタイプ別の意識調査
 設問項目 4)では、各空間プロトタイプの計画上の特徴について、平面見取図および室内パース画像を提示した上で「団らん」を意識した際の活用方法を自由回答式によって問うている。本稿の対象被験者が特に空間認識・デザインに通じた者ではないため、例示にて「A)とB)の特徴となる空間がソファの代わりとして利用するか否か」として尋ねている。またC)に関してはキッチン・ワークトップ前に位置した状態での利便性・機能性について自由回答式にて問うている。

4. 調査結果

3章の被験者感性調査を、平成30年12月11日～平成31年1月13日の期間にて実施した。図6に設問項目1)のうちの被験者属性を示す。また設問項目1)の回答からは、

性別・年代に関係なく談笑、食事、テレビを見る、の項目の回答数が多く、割合の差は見られない結果となった。(図7)30・40代の女性は「家事」の項目の回答が多いことから、家事をしながら団らんに参加していることがわかる。30・50代の男性の分類では「趣味活動」の項目の回答が多く、個人的な行為であっても同じ室内にいる場合には「団らん」であると感じていることがわかった。

4.1 空間プロトタイプ別に見た感性反応

性別・年代に関係なく談笑、食事、テレビを見る、の項目の回答数が多く、割合の差は見られない結果となった。(図

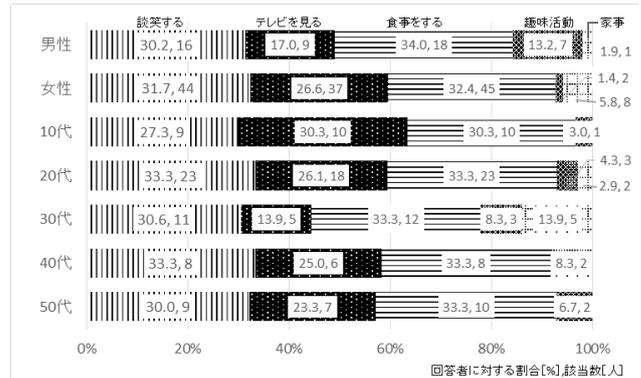


図6：設問項目1)被験者属性各種メディア機器利用時間

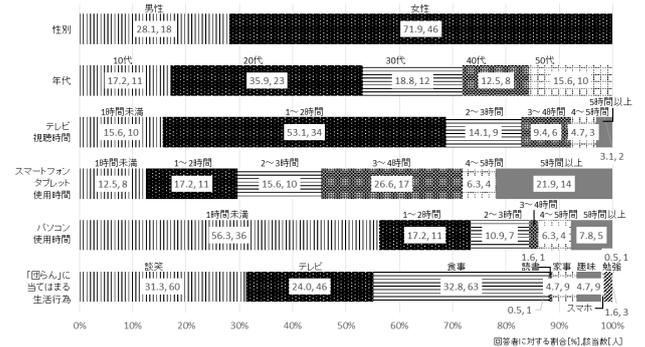


図7：設問項目1)家族の団らんに当てはまる生活行為

表1：被験者感性調査の設問項目・設問意図

設問項目・細目	概要	回答形式	設問意図と詳細
設問項目1)：家族の団らんに当てはまる生活行為	1 性別	選択式	被験者属性の他、テレビ・スマートフォン・タブレットPC・ブック型PC(据置型を含む)の各々の終日使用時間[h]と、家族の団らんに当てはまる生活行為の種別(談笑する・テレビを見る・食事・パソコンを操作する・読書する・音楽を聴く・趣味活動をする・家事をする・勉強する・仕事をする・スマートフォンを操作する・その他記述式)を上限3件とし複数選択式にて問う
	2 年代	選択式	
	3 テレビ視聴時間	選択式	
	4 スマートフォン、タブレット使用時間	選択式	
	5 パソコン使用時間	選択式	
	6 「団らん」に当てはまる行為	選択式	
設問項目2)：「団らん」に対する感性反応調査	22項目の形容詞対にて相対評価	5段階回答評価	被験者の「団らん」に対する言語的・空間的感性についての感性反応を得るべく、表2に示す他、22言語対・形容詞対を用いたSD法(Semantic Differential Method)を実施
設問項目3)：生活シーン想起調査	生活シーンにおける行動	選択式	各空間プロトタイプに対し、親・子役であると仮定した際の、各25問・全75問の生活シーンを短文にて提示し、そこでの団らん状態の想起を元に、自身にもそのシーンが当てはまる・当てはまらない・不明の三者択一回答を得る
設問項目4)：各空間プロトタイプ別の意識調査	1 ソファの有無/キッチンの便利さ	選択式/自由記述式	各空間プロトタイプの特徴である点を具体的に尋ねる
	2 「団らん」を意識した時の良い点	自由記述式	各空間プロトタイプの特徴である空間において「団らん」を意識した際の印象回答を得る
	3 「団らん」を意識した時の悪い点	自由記述式	
	4 各タイプについて感じたこと	自由記述式	各空間プロトタイプの包括印象回答を得る

7)30・40代の女性は「家事」の項目の回答が多いことから、家事をしながら団らんに参加していることがわかる。30・50代の男性の分類では「趣味活動」の項目の回答が多く、個人的な行為であっても同じ室内にいる場合には「団らん」であると感じていることがわかる。

4.2 空間プロトタイプ別に見た生活シーン想起反応

設問項目 2)にて、各空間プロトタイプへの被験者の「団らん」に対する言語的・空間的感性についての感性反応をSD法により得た。具体的には22形容詞対を5段階の評価尺度で判定した。主因子法による因子分析を行った結果、因子数は3と推定され、それぞれの因子において高い絶対値をもつ形容詞を代表に因子の解釈を行った(表2)。第1因子は「悪い・鬱陶しい・見通しの悪い・不快な」の4つの形容詞を代表に評価・力動性因子と解釈された。第2因子は「寂しい・静かな」の2つの形容詞を代表に活動性因子と解釈された。第3因子は「ありきたりな、現実的な」の2つの形容詞を代表に感受性因子と解釈された。各プロトタイプにおける因子得点の平均値(表3)から、A)「設えベンチ併用型」では活動性因子・感受性因子の得点が高いため、被験者にとっては便利でなじみやすく穏やかな空間であり、キッチン領域とダイニング領域の物理的な近さについて、特段の不快感を感じない程よい距離間を持っていることがわかる。B)「ワークトップ延伸型」は、評価・力動性因子の得点が高いため、本稿における被験者にとっては窮屈で煩わしい空間であるとされ、家族との個人間距離が近すぎることに起因し「鬱陶しい、閉鎖的な、不快な」感性反応を得ている。C)「縁側形成型」は、高得点因子は現示されず、感受性因子得点が低減していることから「家族の気配を感じやすく、静かな、寂しい」の感性反応はないが、「独特で印象的な空間である」と感じていることがわかった。

4.3 各空間プロトタイプ別に見た空間機能の有用性

被験者感性調査の設問項目 4)において、各空間プロトタイプの計画上の特徴について、平面見取図および室内パース画像を提示した上で「団らん」を意識した際の活用方法を自由回答式によって得た。

A)「設えベンチ併用型」では、ソファの必要・不必要に

表2：設問項目 2) 感性反応とSD法形容詞対とその因子解釈

空間プロトタイプ類別	因子1	因子2	因子3
A)「設えベンチ併用型」	-0.53	0.72	0.70
B)「ワークトップ延伸型」	0.51	-0.40	-0.14
C)「縁側形成型」	0.02	-0.32	-0.55

※因子中太ゴシック部分は因子得点高として採択

表3：各空間プロトタイプ別に見た第1～第3因子得点の平均値現示

因子	形容詞	回転後の 負荷量平方和a	因子の解釈
1	狭々しい、悪い、鬱陶しい、暗い、つまらない、危険な、見通しの悪い、洗練されていない、閉鎖的な、不快な	4.09	評価力動性
2	寂しい、地味な、静かな、静かな	3.13	活動性
3	親しみやすい、便利な、ありきたりな、現実的な、印象的でない	3.10	感受性

対し、全回答の71.8[%](46[人])が必要であるとの回答を現示した。同回答者の自由記述を参照するに、「他に比してソファが最もリラックスできる」が16[件]と最も多く、次いで「ベンチよりも柔らかいソファに座りたい」や、「テレビとの距離が遠い」「テレビを見るためにソファがほしい」を総じて8[件]見られた。一方でソファを不要と回答したケースでは、「たまり場ゾーンがソファの役割を果たしている」の回答が20[件]と最多を現示し、「たまり場にクッションがあればソファは不要」「部屋を広く使用したい。ソファを置くと部屋が狭くなってしまう」を総じて7[件]の回答が得られた。以上から、たまり場ゾーンは食事の際にダイニング領域の一部として食事時限にも利用しやすいが、リラックス・寛ぐ場所としては不満と思う向きが多いことがわかる。

B)「ワークトップ延伸型」では、キッチン領域での利便性については、79.6[%](51[人])が便利と回答した。この事由を自由記述から見ると、「配膳・片付けが楽」が24[件]と最多であり、次いで「調理中家族の顔が良く見える・会話ができる」「手伝いがしやすい」を総じて10[件]見られた。一方で、不便との回答したケースでは、「ダイニングテーブルに水や油がはねそうだ」「キッチンの汚れが気になる」「ダイニング領域やリビング領域に煙や臭いが充満しそう」の回答が総じて9[件]見られた。以上から、キッチンワークトップとダイニングテーブルが接続配置されていることで、配膳・片付けの用途上の合理性と、家族間会話を容易にできるとする機能性志向を期待される類型といえる。

C)「縁側形成型」でもソファの必要・不必要を問うているが、75.0[%](48[人])が不必要との回答現示をした。この回答ケースの自由記述では、総じて「縁側がソファの役割を果たしているから不必要」とするものが28[件]と最多であり、次いで「縁側でリラックスすることができる」「縁側で寝転ぶことができる。くつろぐことができる」とする回答が総じて11[件]見られた。一方、必要との回答ケースでは、「Aタイプと同様にソファの方がリラックスできる」が10[件]の最多回答を得た。若年層被験者では、ソファのようなリラックスしやすい柔らかい素材に寛ぎやすさを求めている。

4.4 各空間プロトタイプと「団らん」への活用意識

被験者感性調査の設問項目 3)及び 4)から、各空間プロトタイプの計画上の特徴に対する「団らん」を意識した際の利点・不利点・生活シーン想起から見た活用意識の連関を得た。

A)「設えベンチ併用型」における利点では、「たまり場ゾーンとダイニングテーブルを使用して団らんできる」が65.6[%](42[人])の最多回答を示し、次いで「たまり場ゾーンを使用して団らんできる」が53.3[%](34[人])、併記回答含む)を示した。その他、「家族のお互いの顔が見える」「キッチンとダイニングの距離感が良い」「談笑しやすい」を総じて9[件](併記回答含む)あった。一方で、不利点として「テレビが見づらい」が20.0[%](13[人])を最多とし、「テレビ前のスペースが広すぎる」「ソファでくつろぎたい」を総じて5[件]の回答がみられた。また設問項目 3)の生活

表4：各空間プロトタイプ別の設問項目3)生活シーン想起調査と短文指示内容の平均値現示

問	「窓際たまり場タイプ」生活シーン	「ひとつなぎダイニングタイプ」生活シーン	「縁側タイプ」生活シーン
1	時間が合った家族と朝食を食べる	時間が合った家族と朝食を食べる	時間が合った家族と朝食を食べる
2	家族揃って夕食を食べる	家族揃って夕食を食べる	家族揃って夕食を食べる
3	たまり場でくつろぐ母と談笑する	食事後ダイニングテーブルにとどまり談笑する	縁側で母とくつろぎながら談笑する
4	食後にたまり場でお昼寝をする	食事後に作業スペースでお昼寝をする	食後に縁側でお昼寝をする
5	ダイニングテーブルで家族でおやつをする	ダイニングテーブルで家族でおやつをする	カウンターで集中して学校の課題に取り組む
6	たまり場で洗濯物をたたむ等の家事をする	作業スペースに座り、夕飯の支度をする母と談笑する	夕食後、ダイニングテーブルで学校の課題に取り組む
7	食事後、席にとどまり談笑する	ダイニングテーブルで洗濯物をたたむ等の家事をする	遅く帰宅し、ダイニングテーブルで夕食を食べながらくつろいでいる家族と談笑する
8	遅く帰宅し、ダイニングテーブルで夕食を食べながらくつろいでいる家族と談笑	母と夕飯の支度をしながらソファでテレビを見ている家族とも談笑する	食事後、ダイニングテーブルとテレビ側の縁側にそれぞれが座りテレビを見ながら談笑
9	母と夕飯の支度をしながらテレビを見ている家族とも談笑する	母と夕飯の支度をしながらダイニングテーブルでテレビを見ている家族とも談笑	母と夕飯の支度をしながらテレビ側の縁側でテレビを見ている家族とも談笑する
10	夕食後テレビを見るために窓際の席へ移動し談笑する	ダイニングテーブルで読書などの座ってできる趣味を楽しむ	ダイニングテーブルで家族でおやつをする
11	スマホを操作しながらリラックスしたいのでたまり場に座り姿勢をくす	ダイニングテーブルとソファにそれぞれが座り、テレビを見ながら談笑する	縁側で洗濯物をたたむ等の家事をする
12	テレビを見たいがテレビ側の座っている家族がジャマなのでカウンターに移動	テレビを見たいがテレビ側に座っている家族がジャマなので作業スペースに移動	カウンターでパソコンなどの座ってできる趣味に集中する
13	たまり場で読書などの座ってできる趣味を楽しむ	夕食後、スマホに集中したいので作業スペースに移動する	小腹が空いたのでカウンターでおやつを食べる
14	たまり場に座り、夕飯の支度をする母と談笑する	作業スペースでパソコンなどの座ってできる趣味に集中する	縁側全体に座って複数人でテレビを見る
15	カウンターで集中して学校の課題に取り組む	小腹が空いたのでたまり場でおやつを食べる	カウンターに座り、夕飯の支度をする母と談笑する
16	小腹が空いたのでたまり場でおやつを食べる	夕食後テレビを見るためソファに座る	縁側に座ってテレビを見ながら、食事の支度をする母と談笑する
17	たまり場に座って複数人でテレビを見る	作業スペースで集中して学校の課題に取り組む	ダイニングテーブルに座り、夕飯の支度をする母と談笑する
18	夕食後、テレビ側のダイニングテーブルで学校の課題に取り組む	夕食後、テレビ側のダイニングテーブルで学校の課題に取り組む	スマホを操作しながらリラックスしたいので縁側に座り姿勢をくす
19	カウンターで集中して学校の課題に取り組む	テレビを見ながら学校の課題に取り組みたいので窓際のダイニングテーブルに座る	夕食後テレビを見るためにテレビ側の縁側へ移動し談笑する
20	遅く帰宅し、ダイニングテーブルで夕食を食べながらテレビを見る	ダイニングテーブルの高背の席でソファに座って複数人でテレビを見ながら談笑する	くつろぐ家族と談笑しながら縁側で出かける準備をする
21	くつろぐ家族と談笑しながらたまり場で出かける準備をする	帰宅し、ダイニングテーブルで夕食を食べながらくつろいでいる家族と談笑する	テレビを見たいが縁側のテレビ側に座っている家族がジャマなのでカウンターに移動する
22	テレビを見たいがテレビ側の座っている家族がジャマなのでカウンターに移動	夕食後ダイニングテーブルでテレビを見ながら談笑する	テレビを見たいがダイニングテーブルの高背の席でソファに座っている家族がジャマなのでカウンターに移動
23	帰宅した父がダイニングテーブルで夕食を食べ始めたが、気にせず反対側の席に座って自分のしたいことをする	帰宅した父がダイニングテーブルで夕食を食べ始めたが、気にせず反対側の席に座って自分のしたいことをする	帰宅した父がダイニングテーブルで夕食を食べ始めたが、気にせず反対側の席に座って自分のしたいことをする
24	帰宅した父がダイニングテーブルで夕食を食べ始めたため、テレビを見るのにジャマにならないようにたまり場に座る	帰宅した父がダイニングテーブルで夕食を食べ始めたため、テレビを見るのにジャマにならないようにソファに座る	帰宅した父がダイニングテーブルで夕食を食べ始めたため、テレビを見るのにジャマにならないように縁側に座る
25	帰宅した父がダイニングテーブルで夕食を食べ始めたため、自分もダイニングテーブルに座り談笑する	帰宅した父がダイニングテーブルで夕食を食べ始めたため、自分もダイニングテーブルに座り談笑する	帰宅した父がダイニングテーブルで夕食を食べ始めたため、自分もダイニングテーブルに座り談笑する

表5：C)「縁側形成型」に対する生活シーン想起項の「該当・非該当・不明」別回答群整理の平均値現示

回答の傾向	問番号	指定着座位置指示と生活行動	食事	談笑	家事	テレビ視聴	勉強	趣味活動	その他	居所
「該当する」が多い問群	1	時間が合った家族と朝食を共に食べる	○							ダイニング
	2	家族が揃って夕食を食べる	○							ダイニング
	3	窓際の席#06および#07で、母(娘)と寛ぎながら談笑する		○						縁側
	4	昼食後に#06にて昼寝(うたた寝)をする							○	縁側
	5	#02にて集中して勉強に取り組む								カウンター
	6	夕食後、ダイニングテーブルで環境に取り組む						○		ダイニング
	7	遅く帰宅し、#03にて一人で夕食を食べながら、まわりで寛いでいる家族と談笑する	○	○						ダイニング
	8	食事後、ダイニングテーブルに居る家族と共に、#07に着座しテレビを見ながら談笑する		○			○			ダイニング・縁側
	9	母(娘)と夕飯の支度をしながら#07にてテレビを見ている家族と談笑する		○	○					キッチン
	11	帰宅した父(息子)が#04にて夕食を食べ始めたため、テレビを見るのに邪魔にならないよう#06もしくは#07に移動する							○	縁側
	13	ダイニングテーブルで、家族でおやつをする時間をはじめる	○							ダイニング
	14	#06にて洗濯物を畳むなどの家事をする			○					縁側
	15	#02にてPCなど座ってできる趣味に没頭する						○		カウンター
	17	窓際の席である#04~07に座って家族複数人でテレビを見る					○			ダイニング・縁側
18	#02に座り、夕食の支度をする母(娘)と談笑する		○						カウンター	
20	ダイニングテーブルに座り、夕食の支度をする母(娘)と談笑する		○						ダイニング	
21	スマートフォンを操作しながら動画を見てリラックスしたいので#06に着座し、姿勢を崩す							○	縁側	
23	夕食後、テレビを見るために#07に移動し、家族と談笑する		○			○			縁側	
24	寛ぐ家族と談笑しながら、#06に着座しながら出かける準備をする		○					○	縁側	
「該当しない」が多い問群	10	帰宅した父(息子)が#04で夕食を食べ始めたが、気にせず#05に着座したまま自分のしたいことをする						○		ダイニング
	19	#07に座ってテレビを見ながら、食事の支度をする母(娘)と談笑する		○		○				縁側
	22	食事後にテレビを見たいが、#03~05に座っている家族が邪魔なので#02に移動する					○			カウンター
	25	食事後にテレビを見たいが、テレビ側に座っている家族が邪魔なので#02に移動する					○			縁側
顕著な差が無い問群	12	帰宅した父(息子)が#04で夕食を食べ始めたため、#03もしくは#05に移動して談笑する		○						ダイニング
	16	小腹がすいたので#02でおやつを食べる	○							カウンター

シーン想起から見た活用意識の回答からは、たまり場ゾーンを広く使って談笑・テレビ視聴・趣味活動・勉強のし易さを重視する傾向と一致している。

B)「ワークトップ延伸型」の利点では、「家族の様子を伺うことができる・会話ができる」が57.8[%](37[人])と最多であり、次いで「調理中にも家族の様子をうかがうことができる」「会話ができる」を総じて28.1[%](18[人])の現示を得た。不利点としては「テレビが見づらい(正面から見たい)」が29.7[%](19[人])が最多回答であった。その他「ダイニングテーブルへの水はね等の汚れが気になる」「一人での集中した作業がしづらい」の回答も総じて7[件]みられた。設問項目3)の生活シーン想起から見た活用意識の回答からは、キッチンワークトップ前・ダイニング領域・ソファのどこにいても談笑が容易だろうとする傾向と一致している。またキッチン領域での利便性についての問と同様に、水はね・油はね・臭いの伝搬等の改善が必須とみられる。

C)「縁側形成型」の利点では、「縁側を使用して団らん可能」が43.8[%](28[人])と最多現示であり、「縁側によって居場所が出来そう」の回答も25.0[%](16[人])見られた。次いで「家族の様子がかがえる・会話ができる」「見通しが良い・部屋が広く感じる」「くつろぐことができる」が其々2[件]ずつ見られた。一方、不利点としては、他類別と同様「テレビが見づらい」の回答が最多であり、「縁側に背もたれがない」「キッチンにいる家族が孤立しそう・キッチンと距離がある」といった物理的離隔距離を不満とする回答で占められた。設問項目3)の生活シーン想起からの回答では、談笑・テレビ視聴・趣味活動・家事・昼寝に活用意識を見出す傾向があり、前述と同意義を示した。

5. 考察及び研究余地

被験者アンケート調査の分析結果から、各サンプルモデルの評価を行った。「窓際たまり場タイプ」は便利でなじみやすく穏やかな印象を受ける空間であり、食事中だけでなく食事前後の時間にもたまり場全体を使用して家族団らんがしやすい空間である。またキッチンとダイニングが適切な距離感をもつため、調理中の家族とも団らんすることが可能である。一方で、寝転ぶ、くつろぐために姿勢をくずすことに関しては不満を感じる空間である。「ひとつなぎダイニングタイプ」は家族との距離感が近いと感ずるため、にぎやかな印象を受ける空間である。食事中だけでなく食事前後の時間にもキッチンとダイニングテーブルを中心に談笑しやすく、リビング側にいる家族とも談笑できるため部屋全体で団らんを楽しむことができる空間である。キッチンからの煙や汚れを不快に感じてしまう可能性があるため、キッチンのダイニングテーブルの間にキッチンの手元が隠れる高さの壁を用意することなど工夫が必要になる。また、個人行動する場合にも活動場所はダイニングテーブルに限られてしまうため、作業に集中したい場合には不満を感じる空間である。「縁側タイプ」は独特な印象を受けるが南側の広い縁側を中心に家族の気配を感じやすく、向かい合う配置により視線が合いやすいため安心感を得やすい

空間である。広い居場所の確保とくつろぐことに優れているため、縁側全体を使用して家族団らんを楽しむことが可能であり、生活のさまざまなシーンで活用することができる。一方で縁側には背もたれがないため長時間縁側に座るためには壁側に寄ることや座椅子を使用する、床に座って縁側を背もたれにする、といった工夫が必要になる。

注釈

- 注1) 国内で実際にキッチンに密接したダイニングルームが誕生したのは、戦後住宅難の解消を目指した「日本住宅公団」による共同住宅供給が開始された1951年である。
- 注2) 食事室と炊事場を通路で隔てる等による食寝分離の事例は、古くは明治維新後に建てられた和洋折衷様式の豪奢な邸宅にて見ることができるが、その後1950年以降の「建設省公営住宅標準設計51C型」において、台所を広めに作り食事室と兼用とし居間2つの間取りが確立されたのが一般普及の原点といえる。
- 注3) 床座から椅子座への生活様式移行については諸説あるが、大きくは食寝分離の浸透したなかで、ダイニング・テーブルやダイニング・チェアといった西洋式の生活家具の普及が大いなる役目を果たしていると言える。
- 注4) 比較基本型として本稿で取り上げるに快諾頂きながらも、現場写真の掲載は不可とされたため、本稿中では図面およびデジタルパースのみの提示とする。
- 注5) 従前のダイニングテーブルと一体型のキッチンワークトップの事例では、天端高850~920[mm]のものが多く見られるが、その際はスツールチェアを併用する必要がある。本稿実験ではこれを用いず、比較基本型の生活家具を用いて行うこととしたため、新設天端高を700[mm]とした。
- 注6) ノンバーバル・コミュニケーションとは、個人間が表情を読み取りながら、言語や発話に頼らず接することができる関係を指す文4)。またその際の最小個人間距離を「ノンバーバル・コミュニケーション距離」と呼ぶ。
- 注7) 郵送・電送にて91家庭に240部配布し、調査快諾を得た件数が64件であったためである。

参考文献

- 1) 太田さち、河野安美、渡辺崇子、梁瀬度子：団らん空間に影響を及ぼす諸要因に関する研究(第2報)「主婦の意識を通してみた団らんの実態」、日本家政学会誌 Vol. 40 No. 1, p. 69-73, 1989
- 2) 太田さち、梁瀬度子：キッチンとのかかわりからみた団らん空間のあり方に関する調査研究(第2報)「主婦の団らんへの「ながら参加」の実態からみたキッチンおよび団らん空間の評価」、日本家政学会誌 Vol. 41 No. 9 p881-886, 1990. 3
- 3) 高柳英明、添田貴之：デザイナーのための住宅設備設計「術」、彰国社、pp. 68-83, 2016. 9
- 4) 高柳英明、鈴木雅之、西田司：事例で読む建築計画、彰国社、pp. 12-26, 2015. 2
- 5) 川邊淳子：小中高の発達段階における家族とのかかわり方と住まい方に関する一考察、日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集, 2014
- 6) 総務省情報通信政策研究所：情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査、pp. 12-45, 2017. 7
- 7) 住まいづくり研究所編：親子のコミュニケーションと住まいについてのアンケート、2007. 2
- 8) 中山昌子：人間工学ガイド-感性を科学する方法-、サイエンティスト社、pp. 125-164, 2009. 5

- 9) 高橋鷹志, 長澤泰, 西出和彦: 環境と空間 (シリーズ「人間と建築」;
1)、朝倉書店、pp. 60-64、1997.10
- 10) 井上まるみ: プロが教えるキッチン設計のコツ, 学芸出版社、p46,
2004.2
- 11) 関谷勉: 建築・都市計画のための調査・分析方法、井上書院、p65-70、
p135-141、1987.4